

資 料

豊田市受託事業「災害時の孤立コミュニティゼロへ！」報告書

立川 俊彦¹

はじめに

豊田市には平成 27 年 3 月 1 日現在、13,324 人の外国人住民がおり、市民全体の約 3.1% を占める。豊田市の人口における特徴として、多国籍化と外国人の定住化傾向はますます強まっており、多くの外国人が一時的な滞在者ではなくなっている。また、この地域は近い将来、南海トラフ地震により甚大な被害を受けるとされている。この事業は豊田市が開催した「平成 26 年度学生発⇒豊田市まちづくり提案」において、本学のボランティアサークル「セレンディピティ」が最優秀賞を受賞したことから始まった。災害時に日本語が堪能でない外国人住民に対し、グローバル防災キャンプ等を実施することにより、防災に対する意識づけを行いたいと願う学生の思いを実現するため、大学の担当者として、学生を支援し、豊田市の担当者と連絡を取りながら外国人学生に触れ、80 名を超える参加者を集めるまでのイベントへと発展させていった過程を報告する。

グローバル防災キャンプの概要

豊田市には多くの外国人が住んでいる。彼らの多くは防災に対する意識が低く、災害時には避難所等でトラブルが生じる可能性がある。そこに危機感を持った本学の学生が、前述のグローバル防災キャンプを提案した。平成 27 年 9 月 5 日（土）と 6 日（日）に豊田市の東保見小学校の校庭と体育館を借り、地元の外国人向けに炊出し、起震車と煙道体験、東日本大震災経験者による講演、応急手当等を実施し、災害に対する注意を喚起し、さらには日本人と外国人がコミュニ

ケーションをとるきっかけづくりとして企画された。

実践の過程

活動開始

文字通り、ゼロからのスタートだった。前年までサークルの主力として活動し、「平成 26 年度学生発⇒豊田市まちづくり提案」をしていた学生は卒業し、残った学生が引き継ぎ、グローバル防災キャンプを進めることとなった。

最初に豊田市の担当者、学生と打合せをして、実施内容、周知活動などの大まかな方向性を決めた。担当者は、以前も同じような企画を担当された方で知識も豊富で頼りになった。しかし、こういった外国人を対象とした企画の難しさも理解しており、危機感を抱いていた。協議の結果、準備の期間と気候を鑑み、防災キャンプの日程を平成 27 年 9 月 5 日（土）と 6 日（日）に決めた。また、いきなり防災キャンプを実施するのはリスクが高いため、2 時間程度の交流会をキャンプまでに実施することとした。何度か顔合わせをして知り合いになっておけばキャンプに来やすくなると思った。

対象とする地域についても熟慮した。豊田市はとても広く、市全体を対象とするのは現実的ではない。そこで、一つの地域にターゲットを絞って、そこでの広報活動を徹底し、集客することとした。我々が注目したのは、豊田市保見地区だった。この地域は豊田市の中でも特にブラジル人が多く住んでいる地域で、この地域の小学校は児童の約 60% がブラジル人という小学校もあった。この地域の小学校である東保見小学校も我々の企画に好意的な見方をしており、開催地の確保ができた。

平成 27 年 9 月 5 日、ここが当面の我々のゴールとなった。ここから防災キャンプまでの日数を逆算して

¹ 日本赤十字豊田看護大学 企画・地域交流課

事前にイベントを開催したり、広報活動をしったりしなければならぬので表1のようにスケジュールを決めた。学生主導のまちづくりというコンセプトで始まったこの企画も、学生だけでは限度があり、助言や支援が必要だった。ゴールは決まったのであとはどれだけこの企画を世間に広めるかが問題だった。

表1 防災キャンプまでのスケジュール

日程	内容
5/30	事前交流会
6/20	チラシ配り（おいでんまつり）
6/21	チラシ配り（保見ヶ丘国際フェスタ）
7/4	事前交流会
7/19	チラシ配り（フェスタジュニーナ）

厳しい船出

私と学生が最もこの企画の成否の鍵を握るのは、広報活動だと考えていた。とにかく多くの人に知ってもらわなければ始まらない。周知のツールとしてまずはチラシづくりに取り掛かったが、学生は今までチラシやポスターなど作ったことが無く、なかなかいいものができなかった。まず伝えたいことがはっきりしていない。A4用紙1枚に必要な以上に情報を詰め込み過ぎ、これでは読んでもらえないだろうという出来だった。しかも、チラシができた時点で既に5月初旬。交流会の内容もまだ決まっていない。それでもチラシだけは配ろうと小学校に持っていったところ、日本語だけでなくポルトガル語に翻訳したものがなければ生徒に配付できないと言われ、ほぼ広報活動ができないまま5月30日の事前交流会を迎えることとなった。結果は参加者0であった。

気持ちを切り替えてのリスタート

苦難のスタートを切った我々だが、収穫が無いわけではなかった。小学校や公民館を回ることでブラジル人の国民性が分かり、今後どうアプローチをしたらいいか見えてきた。思っている以上にブラジル人は警戒心が強く、なかなか日本人が主催するイベントに参加したことが分かった。この警戒心を解かなければ成功はありえない。学生と私は保見地区のお祭り等イベントに参加し、我々のことを知ってもらうよう努力した。豊田市役所内の記者クラブを訪問し、取材

していただけるよう依頼した。また、チラシも、私が広報の本を読み、魅力的なチラシの作り方を学び、表を日本語、裏をポルトガル語表記にした。学生とともに地域の小学校にも積極的に訪問し、その甲斐あって7月4日の事前交流会は9名の参加者があった。学生も〇×クイズなど、外国人にも楽しめる分かりやすい内容に工夫していた。そのこともあってか、参加者の反応も良好で、ある程度の手ごたえをつかんだ。参加者9名のうち、2組の親子が防災キャンプへの参加申込をしてくださった。地道に広報活動をした結果だった。

しかし、防災キャンプは1泊2日のイベントで、参加に結び付ける難しさは交流会の比ではない。チラシを配るだけではなく、深く親密なつながりが必要だった。そこで注目したのはブラジル人学校 EAS (Escola Alegria de Saber) だった。EASとは、在日ブラジル人向けのインターナショナルスクールで日本各地に約80校ある。そのうちの 하나가豊田市の浄水にあった。会場の東保見小学校からも近く、EASも本学との交流に積極的だった。私はEASの校長と交渉し、ブラジル人学生と交流する機会をいただいた。そこで本学の学生が、EAS学生に向けてキッチンペーパーを使ったマスクづくりをし（写真①）、我々の活動を周知し、参加を促した。また、EAS教員から進路相談の相談を受けたので、8月21日に本学で開催されるオープンキャンパスにEASの3年生22人を招待し、看護の体験をしていただいた。生徒だけでなく、EASの校長先生はじめ教員の方からも感謝され、キャンプへの参加を学生に促して頂いた。8月以降は、私が保護者相談会に参加したりと、ほぼ毎週EASを訪問し、生徒も先生も私のことを覚えてくれて、次第に声をかけてくれるようになり、徐々に打ち解けてきた。



写真①キッチンペーパーを使ったマスクづくりの様子

EAS と親密な関係を築けたことが、このキャンプの成功へとつながることとなる。

集まらない参加者

8 月も後半に入り、キャンプ本番まで半月を切つて、私の中に焦りが出てきた。参加者が集まらない。8 月 21 日の時点で、3 組 6 名の申込みしかなかった。しかも、申込者は全員日本人だった。あくまで我々が実施するのは外国人をメインターゲットとした「グローバル防災キャンプ」である。このままではこの企画は失敗に終わってしまう。そこで、私は豊田市国際課長と関係各所に防災キャンプへの参加のお願いに回った。ボランティアの方が団地で外国人の学生に宿題を教える NPO 法人など、この企画にかかわらなければ一生知ることのなかった世界を見ることができた。外国人の小中学生が日本の学校の授業について行けず、次第に学校に行かなくなってしまい、社会から外れてしまう。外国人が日本の文化、生活に順応することは日本人が想像する以上に難しいことなのかもしれない。災害時だけでなく、日常生活の中にも解決しなければならない問題があるような気がした。

地道な広報活動が芽を出したのは、8 月も最終週に入ってからだった。EAS から 19 名の参加申込があり、それ以外にも直前に配布したチラシを見て申し込んでくださった方がいらっしや、最終的に 39 名の申込みがあった。(外国人 29 名、日本人 10 名) また、事前に送っていたマスコミへの取材依頼も功を奏し、新聞に掲載されたり (8 月 20 日 朝日新聞)、テレビからの取材依頼も来た。ここへきて防災キャンプが急速に大きくなっていった。

迎えた当日

申し込んでくれた方が本当に来てくれるのか不安だったが、実際キャンプが始まると、多くの方が参加してくださった。最終的には 81 名 (ブラジル人 51 名、日本人 30 名) の参加があった (写真②)。東日本大震災に被災された方の講演では、多くの方の質問があった。起震車体験では初めて震度 7 の揺れを体験し、地震の怖さを身をもって知ったと言っていた親子がいた。炊出し訓練では、日本人と一緒にカレーを食べ、もはや国籍の垣根はなかった。このキャンプを通



写真②キャンプ終了後に参加者、スタッフで記念撮影

じて防災への意識が高まっただけでなく、このキャンプがブラジル人と日本人の架け橋になったのではないかと思った。

学生も予想以上の参加者の数に感激し、ダンボールで作る寝床作りなど学生が主体となって行った企画では活き活きと外国人に対して説明し、手取り足取り教えていた。

まとめ

キャンプ自体は成功に終わったといってもいいと思うが、課題もたくさんあった。まず、学生と社会人の意識の違いがあった。学生はあくまでサークル活動で楽しくやりたいという思いがあり、豊田市の担当者や私は仕事なので成功させなければならないという思いがあり、そのギャップはなかなか埋めることはできなかった。スケジュール管理一つとってみても、捉え方が全く違い、我々があと 1 ヶ月しかないと感じているのに学生はまだ 1 ヶ月もあるという考え方だった。学生に社会人の考え方に合せろというのも無理な話なので、学生に責任はないのだが、遅々として計画したことが進まないことには焦ることが多かった。結果、広報やチラシづくり、スケジュール管理等は私が担当し、学生はイベント内容を考えるという役割に分かれることとなった。だが、学生は外国人に対しても積極的に声をかけ、チラシを配る際にも仲良くなろうと努力している事は伝わった。交流会の内容もスリッパ作りなど言葉よりも体を使ったものが多く、ポルトガル語を話せないことを感じさせない内容だった。参加した外国人からも好評で、交流会に参加したことがきっかけでキャンプにも参加してくれた人もいた。いい意味で規則に囚われず、大人の発想ではできないものば

かりだった。

最後に今回のキャンプを通じて、外国人が災害に対して意識が持てないという問題以外にも、豊田市が抱える様々な問題が見えてきた。団地には多くの小中学生が日本の学校になじめず、学校に行けていない問題がある。ごみの分別など生活のルールも守られていない現状があり、それが日本人との軋轢を生んでいる。ブラジル人だけで生活を完結させることができる

ため、ブラジル人と日本人の接点が他の地域と比べて少ないのだろうと考えられる。災害時にお互いが協力するためには普段からの良好な関係作りが欠かせない。今回多くの方が参加して下さったのは、外国の方と本気で向き合ったからだと信じている。来年以降も EAS との交流は続く予定である。外国人と日本人の壁はまだ厚く高いものではあるが、いつかこの壁を取り払えるようこれからも努力していきたい。